

安政伊賀上野地震の城郭被害

三重県鈴鹿地域防災総合事務所* 盆野 行輝

Damage to the castle by “Ansei Iga-Ueno Earthquake” focusing on “Iga-Ueno Castle”

Yukiteru Bonno

Suzuka Regional Disaster Prevention and General Affairs Office, Mie Prefectural Government,
5-117, Nishijo, Suzuka, Mie, 513-0809 Japan

The 1854 Iga-Ueno Earthquake is well-known by serious damage at Iga legion in west Japan. Iga-Ueno Castle suffered serious damage by the quake. According to the intensive study through the historical documents at that age, it was understood that quake caused various phenomena such as landslide, landslip, cracks in the ground, and liquefaction in addition to strong shaking. It suggests the possibility that landslip and so on increased the damage. The damage inside the castle was more severe than outside the castle.

Keywords: Iga-Ueno Earthquake, Iga-Ueno Castle, Historical documents, Landslip, Liquefaction.

§ 1. はじめに

嘉永七年六月十五日(1854年7月9日)午前2時頃に発生した安政伊賀上野地震(以下、「伊賀上野地震」という。)は、『日本被害地震総覧599-2012』[宇佐美ほか(2013)]によれば、地震の規模はM7 1/4±1/4、震源断層は木津川断層系に比定される。この地震は、伊賀・伊勢・大和諸国を中心に大きな被害をもたらし、同書では、倒壊家屋5,780棟、死者1,308名と推計する。中でも藤堂藩32万石の主要な領国であった伊賀国(10万石)の被害は特に甚大で、倒壊家屋2,270棟、死者625名と被害の過半に迫る。また、伊賀国支配の拠点として城代が置かれた伊賀国上野城も城郭内外で大きな被害を受けたことが記録されている。

伊賀上野地震については、幕末に発生した地震であることから、個人による日記や記録、書状、公的記録である藩政史料など様々な史料が豊富に残されており、地震の様相を詳しく窺い知ることが出来る。そのため、これまでに多くの先行研究があり、様々な視点からの研究成果が得られている。伊賀国内の被害については、萩原尊禮(編)『古地震』所収の論考[大長・藤田(1982)]で詳細に検討されており、町方・郷方の死者数を明らかにしているほか、町屋の倒壊数から上野城下における家屋倒壊率を25%と求める。また、一部郷方の集落における高い家屋倒壊率を指摘するほか、町方・郷方における死者数と倒壊家屋数の関係から一定の倒壊家屋数に対する死者数の割合が異常に高い集落を導き出し、震源断層について考察を加えている。

このように、大長・藤田(1982)で伊賀国内の被害

については、町方・郷方について詳細な検討が加えられているが、藤堂家中と城郭の被害については、詳しく論じられていない。また、自治体史においても、伊賀上野地震による被害を記事として取り上げるが[伊賀市(編)(2016)]、城郭における災害について言及する点は少ない。

城郭研究全般においても、築城後の動向に着目するものは稀で、災害による城郭被害に言及するものは多くない。しかしながら、2011年東北地方太平洋沖地震による白河小峰城の石垣被害や2016年熊本地震による熊本城被害を契機に、地震による城郭被害について関心が高まっており、地震動と城郭被害との関係についても知見が蓄積されつつある。城郭の立地条件は個々に異なるほか、築城後の履歴もそれぞれ異なることから一般化は困難であるが、地震動の大きさや方向などによる被害の様相との関係については一定の物差しが得られることが期待される。

こうした中、伊賀上野地震による城郭被害の様相を詳らかにすることは、他の被害例との比較を可能とし、地震像のよりよい理解に資すると考える。

本稿は、地震発生から復旧・復興に至るまでの藤堂藩の様々な対応やそれに伴う様々な記録から、伊賀上野地震による城郭の被害や城内侍屋敷の被害を考察し、地震被害の様相の一端を明らかにしようとするものである。

なお、本稿では、外敵からの侵入を防ぐため、堀、石垣、土居などで区画された施設を「城」、堀、石垣、土居及びそれらで区画された範囲全体を「城郭」、城郭の内側を「城内」、その外側を「城下」とする。

* 〒513-0809 三重県鈴鹿市西条 5-117
電子メール: bonnoy00@pref.mie.jp

§2. 伊賀国上野城の概要

伊賀国上野城(以下、「伊賀上野城」という。)は、三重県西部に位置し、奈良県、京都府、滋賀県に接する伊賀盆地北部の標高 179m の丘陵に築かれた、いわゆる「平山城」である(図1)。伊賀国は古代より大和から東方へ通じる交通の要衝にあり、その後も東西の文化、経済、情報の結節点として重要な位置にあった。

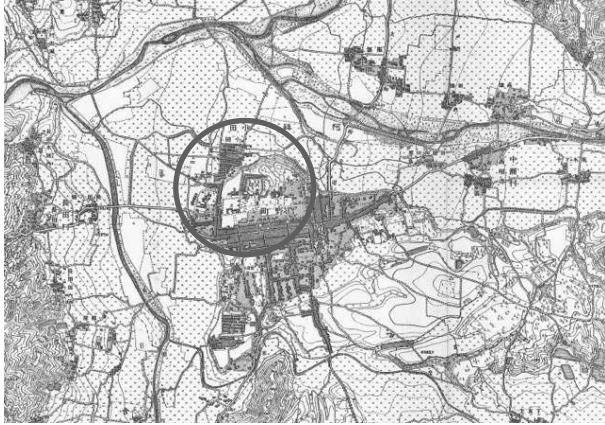


図1 伊賀上野城周辺の地形図

※ 図中の円は伊賀上野城の位置を示す
(所在地: 三重県伊賀市上野丸之内)

国土地理院旧版地図: 1/20, 000地形図「上野」

(明治25年測図・同31年修正, 同31年発行)より
Fig.1 Topographical map around Iga-Ueno Castle.
(Location:Ueno-marunouchi,Iga,Mie.)

城の歴史は、天正十三年(1585)に豊臣秀吉に伊賀国に移封された筒井定次が築城したことに始まる。定次は、丘陵の最高所に本丸を配し、その北東部に三重の天守が築造されたとされる。

慶長十三年(1608)、伊予国から築城の名手・藤堂高虎が伊賀国へ入封、城郭を大幅に改修・拡張した。その際、それまでの大坂を守るための城から、大坂を攻める城へと大きくその性格を変貌させた。具体的には、本丸を西へ拡張し、高さ 15 間(28.5m)の高石垣と内堀を巡らし大坂方への備えとした。さらに、その外側に外郭を廻らせ二之丸とし、藩の政庁である「御屋敷」や高禄家臣の屋敷が配された。その東西南 3 面は土居と外堀で囲む。残る北面は自然の崖地により要害とし、堀沿いの土居上には 10 棟の櫓(二重櫓 2 棟、一重櫓 8 棟)を配し外敵に備えた。また、改修にあたっては、城の正門を従来の北側から反転させ、南面に多門櫓を備えた重厚な大手門を東西に設けて、その内側を城内とした(図 2)。『高山公実録』(伊賀市上野図書館蔵)[上野市古文庫刊行会(1998)]

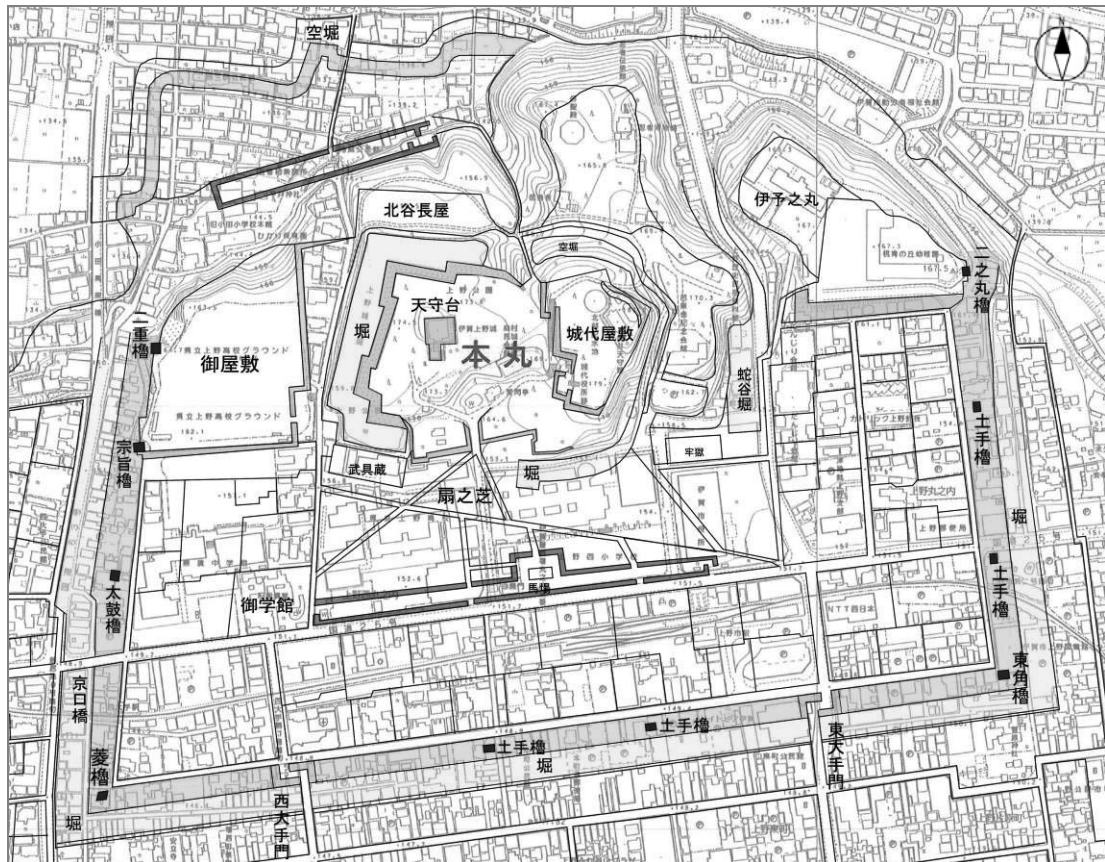


図2 伊賀上野城縄張図

(三重県デジタル地形図 1/5,000 に『伊州御城下破崖損所絵図』(図 4, 5)をもとに加筆)

Fig.2 Figure of placement of Iga-Ueno Castle.

(drawing the figure on the map based on Fig.4 and Fig.5 by author.)

によれば、「公帝都ニ向ヒテ城門有ルヲ忌玉ヒ此度南陽ニ大郭ヲ築キ」陽ニ大郭ヲ築キ」とあることから天皇の座す京都に向けて城門を開くことを藤堂高虎が嫌い、大手門の位置を移したとする。

また、城下には、外堀の東西に侍屋敷を配し、外堀南側には東西に商家が立ち並ぶ三筋町を構えた。さらに三筋町の南には伊賀者と鉄砲組など軽輩の侍屋敷を配したほか、東西両大手門とその中間地点を起点とする 3 本の通りが南へ延び、碁盤目状の街並みが形成された。

なお、本丸には天守閣が計画されていたが、完成間近の慶長十七年九月二日(1612年9月26日)、大風のため倒壊した(『高山公実録』)。その後、元和元年(1615)の大坂夏の陣により豊臣家が滅亡したことから築城工事は中止され、天守閣は再建されることなく天守台のみ残された。その後は、未完のまま、津城を本拠とする藤堂藩の支城として存続、江戸時代を全うし、明治維新後の廢城を迎えることになる。

§ 3. 城郭被害について

3.1 文字史料が伝える城郭被害

伊賀上野地震による伊賀上野城の被害については、幕末に発生した地震であったことから、多くの同時代史料が残されている。全てを挙げれば枚挙に暇がないが、地震後遅くない時期に、幕府への届出のため藤堂藩によりまとめられたと考えられる史料が 2 点伝えられている。

1 点目は、『嘉永甲寅六月地震記』(西尾市岩瀬文庫蔵)に収録された『藤堂家御届書』[東京大学地震研究所(編)(1986)]である。『嘉永甲寅六月地震記』は、伊賀上野地震にかかる各地からの情報を集成したもので、個人からの来翰や被災した大名から幕府に提出された届出などが多く収録されている。『藤堂家御届書』は、そのうちの大名からの届出の一つである。

この史料では、「先達而為御知被仰進候御領分六月十三日ヨリ余程ノ地震毎々有之同十五日暁大地震ニテ」とし、その領分を伊勢、伊賀、山城大和に分けて、その領分内の城郭、町中、郷中被害を記載する。また、城郭の被害については、箇所ごとに詳細に被害を記載する。なお、届出の日時は閏七月二十九日(1854年9月21日)で、取りまとめに地震発生から約 2 か月半を要したことが分かる。被害が甚大であったことから、被害の集約に時間を要したのであろう。

なお、本史料は、儒医にして本草学者である山本亡羊(1778~1859)が京都の自宅で主宰した家塾・平安讀書室[西尾市岩瀬文庫(2010)]の旧蔵書で、その編者は、亡羊の二男で、亡羊の代講、代筆を行うなど父を大いに援け、後に家塾を継いだ溶室こと山本錫夫(1809~1864)であることが知られる。来翰の多くが、本草学者、儒者、蘭学者などとしていずれ劣

らぬ知識人からのものであることから、平安讀書室の全国に広がる人脈を通じて、溶室本人または亡羊が得た情報を集成したものであると考えられる。そうしたことから、本史料の内容は信用度が高く、伝聞情報ではあるが、一次史料と同様に取り扱いやすい資料であると言える。

2 点目の史料は、宇和島伊達家文書として宇和島伊達文化保存会に所蔵される『破損調書』所収の『伊勢伊賀大和領分地震ニ付 破損所之覚』[東京大学地震研究所(編)(1986)](以下、『破損所之覚』とする。)で、伊勢、大和、山城国の藤堂藩領内の地震被害と併せて、「伊賀崩損候分」として、伊賀上野城を含む伊賀領分内の被害を詳細に記録している。

なお、この史料は年紀の記載がないことから、まとめられた時期は不明であるが、そこに記された城郭被害は具体的かつ詳細である。また、作成時期と同様に、伊勢、伊賀国などの地震被害が遠く離れた四国・宇和島に何故残されたかの経緯は不明であるが、当時の宇和島藩主で、幕末四賢侯として知られる伊達宗城(1818~1892)は、同世代であった藤堂藩主・藤堂高猷(1813~1895)とは、当時の外交・政治の重要課題であった「海防論」を通じて密な交流があったようで、高猷が著した海防等の意見書を水戸藩主・徳川斉昭に呈覧に供している。宗城は高猷を「当時格別之近親ニ御座候」[河内(編)(1993)]としており、こうした交流を通じて、藤堂藩の被災情報をいち早く入手したのではないかと考えられる。

次に、地震による城郭被害の全貌を把握するため、この 2 点の史料をもとに伊賀上野城被害を末尾に一覧表でまとめた(表 1)。なお、表 1 の一覧表で示す城郭被害の記録を、以下、「被害記録」とする。

これら史料を比較すると、記載された被害の内容は、倒壊した櫓の数を「29ヶ所」とする『藤堂家御届書』の明らかな誤記を除けば、ほぼ一致する。『破損所之覚』の作成時期が記されておらず引用・被引用関係が明らかでないが、記載された情報量の多寡から、『藤堂家御届書』は『破損所之覚』の情報を要約し、作成されたと考えられる。

また、これらの史料からは、城代屋敷や東西両大手門、櫓を始め城内の主な建物が悉く倒壊又は大破していることが分かる。さらに、城内の被害については、「地所所々震裂地下り凡二丈程くゑ込込に相成」、「地形共高さ拾間長さ百七間谷底へ崩落」、「地所震下り」、「地形共震下り」、「地所割下り」、「惣躰地震震裂地下り」(『破損所之覚』)などと土砂崩れや地滑りなど斜面や地盤崩落を想起させる記述が随所に見られ、地盤災害の様相を呈していたことが垣間見られる。こうした斜面、地盤の崩落が、城郭の被害を大きくした可能性が示唆される。

3.2 家中の動きから見る城郭被害

地震直後からの藩の災害対応については、伊賀市上野図書館が所蔵する『安政年間 地震ニ関スル記録』(以下、『記録』とする。)(図3)[東京大学地震研究所(編)(1986, 1987)]が被災者の救済から城郭の復旧・復興に至るまでを詳しく記録する。

記載内容からは、藤堂藩家中による公務日誌であると考えられる。藩政記録としては城代家老の政務日誌である『廳事類編』(伊賀市上野図書館蔵)[上野市古文獻刊行会(1977)]があるが、地震により城代屋敷や諸役所が大きな被害を受けたことや、地震後の対応に追われたためであろうか、「大地震ニ付六月十四日より七月朔日迄筆記無之候之事」とあるように地震後の六月十五日から七月一日まで詳細な記録がないことから、『記録』はその空白を補う貴重な史料である。記事の記載方法が『廳事類編』に酷似することから、城代家老又はそれに近い家臣により、その空白を補う意図でまとめられたと推測される。内容は、主に人や情報の動きにかかる記述が多く、城郭被害を直接記録するものではないが、時系列でのそれら動きから城郭被害の様相を垣間見ることができる。

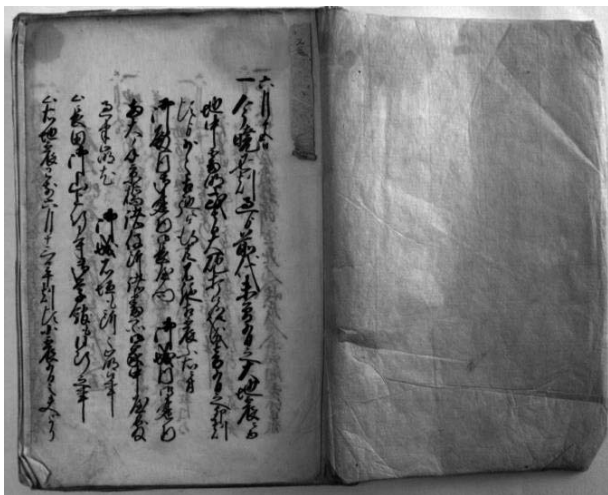


図3 『安政年間 地震ニ関スル記録』
(伊賀市上野図書館蔵)

Fig.3 Official record about “Ansei Iga-Ueno Earthquake”.
(owned by Iga City Ueno Library.)

『記録』には、六月十五日の条に「御殿内御建物御長屋向御城内御建物両大手京橋諸役所諸番所御家中屋敷過半崩」とし、城内の建物の過半が倒壊したことを記録する。さらに、「地震ニ付建物倒レ候丸之内御家中は最寄之芝手江幕囲ひたし罷出仮小屋出来之上」と城内に屋敷を持つ藩士が本丸南に広がる空地である「扇之芝」へ避難したことが分かる。このことから、城内の建物に大きな被害が出たことを窺わせる。

さらに、同日、家中の屋敷の被害状況や死者・怪我人を調査するため、歩行目付とその加役を派遣す

ることを普請奉行が伺い出て許可されている。同じく、普請奉行は被災した家中に対し炊き出しを行うことも伺い出て許可されており、これらのことから被害の大きさを窺わせるとともに、地震直後の災害対応が、普請奉行が中心となって行われていたことが分かる。なお、この炊き出しは、六月十九日(7月13日)には下行米の交付に切り替えられ、終了した。

3.3 絵図に記録された城郭被害

安政伊賀上野時地震の被害を伝える史料は豊富であるが、その中に城内と城下の被害を詳細に記録した絵図が残されている。『伊州御城下破崖損所絵図』(伊賀市 岡森明彦氏所蔵)と題された大小2枚の彩色絵図である。

大絵図は、縦132.0 cm、横191.5 cmで、上野城下の街路と侍屋敷、寺社が敷地を区画して描かれ、敷地毎に居住者名、寺社名が記載されている(以下、「城下被害図」とする。)(図4)。

また、凡例は、「御家中寺社破屋」を灰色、「町屋破屋」を赤色、「地形損所」を白色、「道」を黄色、「水」を水色とし、侍屋敷、寺社のほか町家の被害を彩色により示す。なお、凡例の但し書きには「但し惣倒又ハ五分六分倒 黒白之廣狭ニ依テ分ル」とあり、城下の侍屋敷や寺社については、倒壊程度を敷地に対する彩色の割合で示している。これに対し、町屋については、街路に面した側のみ凡例に従い朱書きし、その範囲を示している。町屋被害の把握が表側からのみ行われたと推測される。さらに、町屋については、町毎の倒壊家屋数を集計し、「潰家」としてその件数を付記している。

一方、小絵図は、縦53.2 cm、横71.6 cmで、上野城内の建物、石垣、地形などの被害を彩色により示す(以下「城郭被害図」とする。)(図5)。城内の区画、建築物については、その名称の記述はなく、二之丸内の大手門、櫓、長屋など独立した建築物のみ簡略な立体図で描かれる。また、侍屋敷とそれに隣接する一部公的施設については、敷地毎に区画され、その居住者名、施設名が記載されている。

凡例は、「石垣地形損所」を白色、「石垣孕所」を赤色、「御家中破屋」を灰色、「御修復ニ不拘損所」を橙色、「芝土居」を緑色、「水」を水色、「道」を黄色とする。なお、区画された侍屋敷等については、凡例に但し書きはないが、「城下被害図」同様、倒壊程度を敷地に対する彩色の割合で示している。

なお、これら絵図は、『古地震』や『三重県史 資料編近世 4(下)』[三重県(編)(1999)]に図版で紹介されている。『古地震』では城下の家屋倒壊率を求めるにあたり、基礎数値として城下絵図に付記された町毎の潰家数が用いられたが、絵図の作成経緯や文字以外の描画情報については、これまで十分に検討されてこなかったようである。そこで、両絵図の作成経

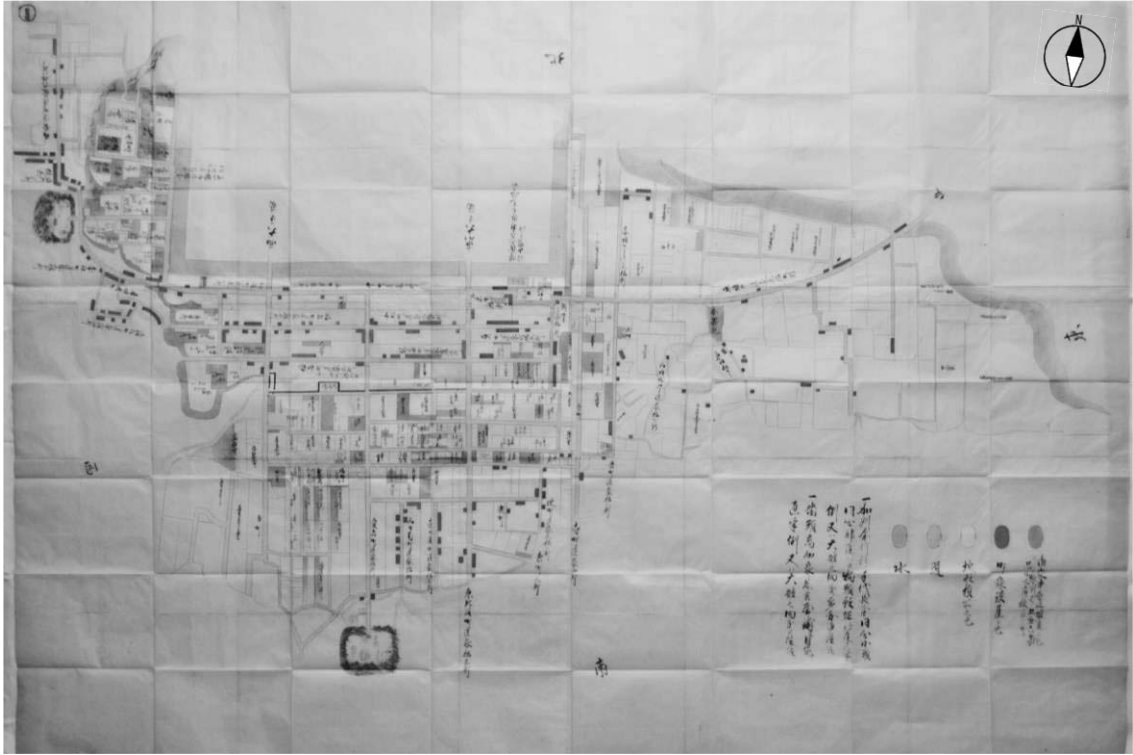


図4 『伊州御城下破崖損所絵図(城下被害図)』(伊賀市 岡森明彦氏所蔵)

※ 図中の方位は筆者により追記. 以下同じ

Fig.4 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (map of the castle town).
(owned by Mr. Akihiko Okamori, Iga City.)

(adding an azimuth mark by author; the same shall apply hereinafter.)

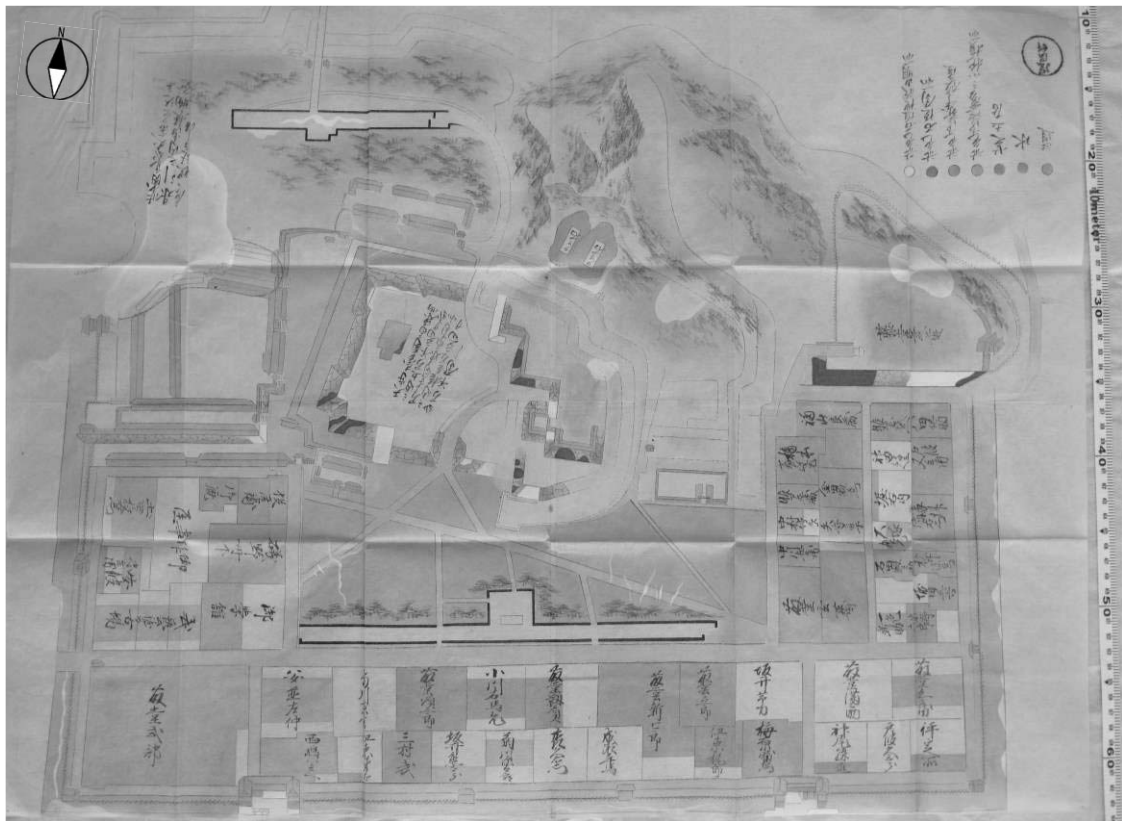


図5 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図)』(伊賀市 岡森明彦氏所蔵)

Fig.5 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (map of the castle).
(owned by Mr. Akihiko Okamori, Iga City.)

緯とそこに描かれた情報を抽出のうえ、伊賀上野地震による伊賀上野城の被害をさらに検討する。

§ 4. 『伊州御城下破崖損所絵図』の検討

4.1 絵図の作成経緯

『伊州御城下損所破崖絵図』には、大小 2 枚の絵図のほか、絵図が収められた袋(図 6)とそれに添えられた書状(図 7)が残されている。

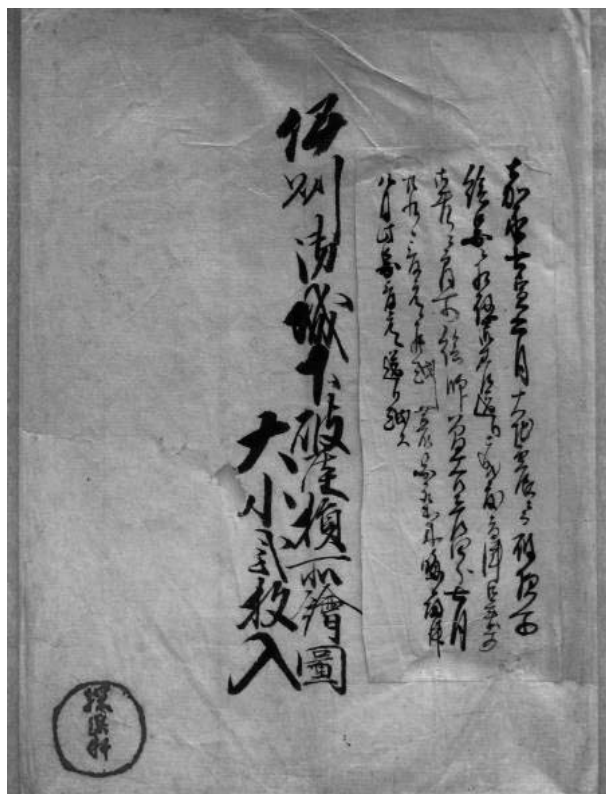


図6 袋(表題:『伊州御城下破崖損所絵図 大小式枚入』)(伊賀市 岡森明彦氏所蔵)

Fig.6 Envelope belong to Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town.
(owned by Mr. Akihiko Okamori, Iga City.)

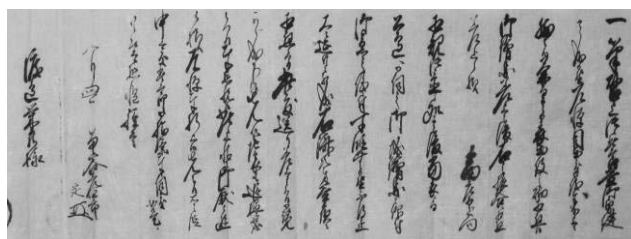


図7 書状(差出:曾谷彦四郎,宛所:渡辺栄蔵)(伊賀市 岡森明彦氏所蔵)

Fig.7 Letter belong to the map of the damage situation at Iga-Ueno castle town.
(owned by Mr. Akihiko Okamori, Iga City.)

袋は、表に『伊州御城下破崖損所絵図 大小式枚入』と表題が記載されているほか、付箋の添え書きが貼付されており、次のように記されている。

嘉永七寅六月大地震ニ而破損所
絵図ニ相認、御差送りニ成度旨、津御年寄
御共ニ而、同所絵師曾谷彦四郎七月
廿九日ニ爰元へ罷越、荒図罷出来、晦帰津、
八月此図爰元へ送り越ス

この記載内容から、大小 2 枚の『伊州御城下損所破崖絵図』は、絵師の「曾谷彦四郎」が、七月二十九日に、津の家老と伊賀に出向き、一旦絵図下書き(「荒図」)を作成、翌日の七月三十日に津へ戻った後、八月に改めて絵図を伊賀へ送ってきたものであることが分かる。なお、ここに記される絵師・曾谷彦四郎は、安政四年の藤堂藩津家中の分限帳(『安政四年津藩分限帳』[堀井(1984)]に「金三両四人扶持曾谷彦四郎」と名前が見られることから、津附の絵師であったことが分かる。

また、書状について、以下、全文を記す。

一筆啓上仕候、此節益御勇健
被成御座、乍憚目出度御儀奉存上候、
然者兼而其御表出役之砌、相応候
御絵図差上之後、右之振合ニ相応、
差上候様 上西庄五郎へ向
相規仕置候処、其後当表ニ而
公辺へ御伺之御城絵図被仰付、
御急之儀ニ付、寸暇無御座、不得止
大ニ延引ニ相成、右濟次第昼夜ニ
相応候間、此度送り差上申候間、御覽
可被成下候、先以地震も追纏ニ相成
候間、奉恐悦候、此上情々御厭被遊
候様、乍憚奉祈上候、先者右之段
申上度、此節御機嫌奉伺度、如是ニ
御座候、恐惶謹言

八月四日 曾谷彦四郎
定(花押)

渡辺栄蔵様

書状の差出、宛所から、八月四日に「曾谷彦四郎」から「渡辺栄蔵」に宛てられたものであることが分かる。宛所の「渡辺栄蔵」は、地震後の災害対応の中心にあった普請奉行であったことが知られる「渡辺栄蔵」であると考えられる。内容については、詳細は不明であるが、以前、渡辺栄蔵が「御表出役」であった時に曾谷へ指示した絵図につき、一度は提出したものの、「振合」(照合の意味か。)をしたうえで提出するよう「上西庄五郎」に厳命したようである。しかし、その後「公儀」に御伺いをたてるための城絵図の作成を仰せつかり、急なことで日がなく、やむなく遅れてしまったこと、前段の絵図の件が済み次第に取り懸って、ようやく出来上がったのでそれを送ること、については確認

されたい旨を記している。

なお、書状が差し出された八月四日は、書状中に「地震も追纏ニ相成」とあることから、嘉永七年に比定される。また、このことから、ここに記された上西庄五郎は、後に伊賀で最初の衆議院議員となり、江戸時代には自身も「上西庄五郎」と称し藤堂藩絵師も務めた「立入奇一」の父「上西宗牧」[吉村(2010)]に比定される。

また、余談ではあるが、書状後段に記す絵図は、「公辺へ御伺之御城絵図」とあることから城郭の修復に際して幕府へ提出するいわゆる「修復願絵図」を指しているものと考えられる。城郭修復にかかる手続きについては、幕府から許可する旨の老中奉書が発給されたことが『記録』に記されるが、それ以外に修復手続きに関する記事が見られないことから、城郭修復にかかる絵図は本城である津で津附の絵師が中心となって作成していたと推測される。

4.2 絵図の作成経緯にかかる考察

『記録』には、「曾谷彦四郎」の消息を伝える記事が残されている。嘉永七年六月二十九日(1854年7月23日)の記事に、「津表画師曾谷彦四郎、弟子老人召連、此度爰元損し之模様、図取候様被仰付罷越候段、津普請奉行方之来書、爰元普請奉行方之さし出、披見之上、何之異存無之旨遣之」とあり、津の普請奉行から伊賀の同役に対して、地震被害の状況を絵図に書き取るため、津の絵師「曾谷彦四郎」とその弟子を伊賀に派遣することについて打診しており、伊賀方でそれを受け入れたことが分かる。六月二十九日という地震から半月のやり取りであることから、地震後の様々な災害対応で混乱する伊賀の状況を見かねて、本城である津が応援として手を差し伸べたのではないかと考えられる。

このことも踏まえ、『伊州御城下損所破崖絵図』の作成経緯について考察したい。

まず、袋の添え書きと書状から、『伊州御城下損所破崖絵図』の作成者は、絵師「曾谷彦四郎」であることが言える。次に、『記録』から、「曾谷彦四郎」は、津附の絵師で、津普請奉行から被害状況を絵図に認めるため伊賀に派遣されたもので、自身で被災地を実地検分のうえ絵図を作成させたことが分かる。

また、袋添え書きから、「曾谷彦四郎」が伊賀に派遣されたのは、津から伊賀へ絵師の派遣について打診があつてから1ヶ月後の嘉永七年七月二十九日(1854年8月23日)であり、下書きを作成して翌日三十日(8月24日)には津へ戻ったことが分かる。さらに絵図が伊賀へ届いたのは、書状の日付から八月四日(1854年9月25日)以降ということになる。嘉永七年は閏年で閏七月があつたことから、絵図の作成に1ヶ月を要したことになる。このことは、「寸暇無御座、不得止大ニ延引ニ相成」と絵図の作成が大幅に遅れた

とすることに符号するとともに、作成された絵図が下書きを基にした清書であったことを窺わせる。

また、これにより、地震発生から2ヶ月半後には、城郭、城下の被害調査を終えていたことが分かる。

4.3 絵図の精度

2枚の絵図は、ともに丁寧な筆致で描かれており、描かれた街路についても、東西方向に穿たれた外堀に対して城下西端の街路でやや軸にずれがあるものの、近世の街路をほぼ踏襲する現在の街並みと整合している。また、両絵図は、ほぼ同縮尺で作成されており、彩色の凡例が異なるという難点はあるが、城下絵図に城郭絵図を重ねることにより、伊賀上野地震による伊賀上野の被害を一目で俯瞰することができる秀逸な絵図であると言える(図8)。

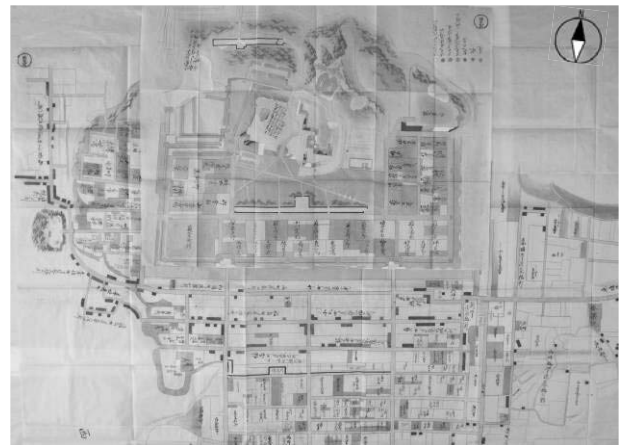


図8 『伊州御城下破崖損所絵図(合成)』
(図4と図5を重ね合わせ)

Fig.8 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town. (overlying of Fig.4 & Fig.5.)

次に、記載された内容の正確さを確認するため、いくつか文字史料に残された記録と対比したい。

前述の『嘉永甲寅六月地震記』(西尾市岩瀬文庫蔵)には、藤堂藩の儒官であり、伊賀の自宅で家族とともに地震に遭遇した猪飼貞吉が宛てた書状(『伊賀上野儒官猪飼貞吉ノ状』[東京大学地震研究所(編)(1986)、大長・藤田(1982)]が収録され、地震の様子を次のとおり生々しく伝えている。

○伊賀上野儒官猪飼貞吉ノ状 村上真輔宛
(中略)当地六月十三日八時前地震、皆々庭上へ出テ候共、格別ノ震ニモ無御座候。相続八時過ト相覚へ又一震、是通例ヨリ大ニテネリ堀損候処モ御座候。夫ヨリ西ノ方ヨリ不絶地ヒ、キ有之、時々小震御座候故、或ハ京撰ノ間大地震ニテ其余波ニモ可有之哉、何レ不油断ト相共ニ警戒、其夜ハ寝不申候。十四日ニ至リ地ヒ、キハ不絶有之候エ共、格別ノ震無御座、人心稍怠リ候処、

其夜八ツ時前ニ至リ忽一震、天地一時ニ覆ルカ如ク、実ニ前代未聞ノ大震、譬ヘハ物ニ突当候テ蹴上ケ候様ノ震ニテ、凡ソ三尺斗モユリ上ケ候様相覚候。小生方兩人ノ男兒、兄ハ九才弟ハ三才、無人ノ小家ニ候故、平生ヨリ火急ノ節ハ兄ノ方小生抱キ、小兒ハ家内抱キ遁候様申合置候事故、小兒ヲ家内直ニ抱キ漸ク蚊帳ヲ出ルト直ニ、寢所夜具ノ上ヘ壁倒レ、小生ハ倅ヲ抱キ椽先ヘ下リ候ト直ニ、壁材木等足先ヘ倒レ掛リ、其上ヲフミ相通レ申候。家ハ忽奥通り忽崩レ、僅ニ表ノ座敷一間大破ニテ残居候。今一足ノ遅促ニテ不免死候処、天幸ニテ相述申候。外ニ崩レ候家モ初メユリニユリニテ倒レ候故、中々遁レ出候暇無御座候。(中略) 七月十一日

この中で、十五日の本震に先立つ十三日(1854年7月7日)「八時前」と「八過ぎ」に2度の前震があったことや、「夫ヨリ西ノ方ヨリ不絶地ヒ、キ有之」と前震の後も地響きが続いたことを伝えるほか、「家ハ忽奥通り惣崩レ僅ニ表ノ座敷一間大破ニテ残居候」と表の通り側の座敷を残して自宅の奥側が全壊したことを伝えている。今般、「城下被害図」にこの猪飼貞吉の屋敷を見つめることが出来たので、次の図9に示す。



図9 『伊州御城下破崖損所絵図(城下被害図)』の一部トレース(「猪飼貞吉」屋敷部分)
(図4より作成)

Fig.9 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.4).(around the residence of Sadakichi Ikai).
(The map of Fig.4 is traced by author.)

猪飼貞吉が被災した自宅は、西大手門から南へ伸びる西堅町通から三の町筋を西に入った三軒目に、敷地南面を通りに接して配されていることが分かる。灰色の着彩から敷地北側半分、通りから見て奥側が「破屋」となっており、前述の記述と符合する。

また、伊賀市上野図書館に『嘉永七年伊賀地方大地震略記』[伊賀古文献刊行会(2013), 宇佐美(編)(2008)]にと題された冊子が残されている。この冊子

には筆者名が記載されていないが、藤堂藩の動向に詳しいことから、藤堂藩家中の某氏により記されたとと思われる。自身も在宅中に地震に襲われ、自宅が全壊した様子や壊れた建物から這い出した自身の体験が詳しく記されているほか、隣人の被災状況も記している。以下に抜粋して翻刻文を記す。(文中の句読点は引用者により追記)

扱嘉永七年甲寅庚六月十五日暁地震あらまし記
六月十三日午刻過地震、不事常の地震より強く、又未刻過地震事前ニ増る。我家の土蔵かべ一面落、かまと五寸程動。夫より明動暮四五度も有之付て、其ハ庭上に蚊屋をつり畳を伏しぬ。(中略)十四日も朝より震響ハあれとも、前日よりハ軽く相成故、いかにやいかにいやと思ふから、前夜家外に伏又ハ終夜不寝故、其夜亥半刻頃方障子を明置、震ふ時早く出ん用事して伏しける。たまたま恐怖甚しきハ百人に老人、庭上敷ニ伏し有とか。去程夜丑之刻過、地大ニ震ふ。余ハ未寝迄ニ家倒れぬ。

○我家有しさまを先しるすニ、妻ハ一番に目をさましたるに、川水の出るか如き音する様に思ひ起かえるニ、たちまち家ぐわりぐわりといひて壓かゝりし故、其まゝ三才の小兒をはらの下に入伏居ぬ。余ハ目をさまし見れハ、背の上へ何かおひかゝりし故、されハ地震ニ而家倒れかゝりしと思ひ、暫いかにして出んやと考居るニ、又々ゆりけれハ、何れ棟落て死するとも一先出んと手を上て上の方をやるに、蚊屋かゝりあれハやふり、つり天井をやふり、天井の上へはい出て、母上并ニ妻小共の安否を問ニ、やうやう皆声を合せ、母上います所少しハゆるミ有、此きはに中の小兒六才ニ成物をいたき居られけるよし。妻ハ前ニしるしゝ如く故動ハ出来ず、八才ニ成小兒ハ重く壓られし故、早助出してくれよと云ハは、さ助けんといふともくらくて所をしらす。将天井つり天井かべ杯重りし下なれハ、所を分てわづらう所、震ひハ止時なく、そのうへ材木天井の上に重りありし故、助ん方なく案する已。とても小兒ハ助るべくもあらず、母を出さんと天井をやぶりやうやく出し、六才の小兒もとも出るれハ先よるこべとも、妻と小兒式人しかれ居れハ心おちつかず。母とともに助んと思へど、六才の小兒のまといよれハ、怪我せん事もはかられず、尚思ふに我家ハふるく修覆のとゞかされハ倒れしならん。隣の主人海津氏を頼て助もらはんと呼んとすれど、まだわら屋根の上にあれバ声とゞかす、いさ出てよバんと思ひ屋根やふらんとすれ、中ニあぶれさる故あたりを見れハ、はふに家紋のほりぬきてありしより明く透く故其をたよりにやぶり出、隣を見れハ、隣もたおれ壁石垣土蔵門小屋ニ至まで残りなく

倒れ居し故、ことさらに恐怖ましけり、さて隣の主人よぶに、又隣の主人戸波氏答て云、海津は父子壓れて声もせず、今呼さかし居也云へハ、さてハ甲斐なしと。(後略)

この記述から、筆者自宅が全壊し、母親、妻、子供3人と共に建物の下敷きになったことが分かる。また、筆者の隣家主人は「海津氏」であり、「隣を見れば、隣もたをれ、壁石垣土蔵門小屋ニ至まで残りなく倒れ」と海津邸が全壊したことを伝えている。さらに、「隣の主人を呼ぶに、又隣の主人戸波氏答て云、海津ハ父子壓れて声もせず、今呼さかし居也」とし、この記述から、「海津氏」のさらに隣の居住者が「戸波氏」であることが分かる。

この条件、つまり「海津氏」、「戸波氏」が隣接するという条件に合致する屋敷を『伊州御城下破崖損所絵図』の「城下被害図」(図4)、「城郭被害図」(図5)に求めたところ、「城郭被害図」に見出すことが出来た。城内二之丸の東部の外堀沿いに立ち並ぶ侍屋敷の一角の「海津傳右衛門」、「戸波又兵衛」と記された屋敷がそれである(図10)。



図10 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図)』の一部トレース(「海津傳右衛門」屋敷部分)(図5より作成)

Fig.10 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5) (around the residence of Denuemon Kaizu).
(The map of Fig.5 is traced by author.)

「海津傳右衛門」屋敷とその隣家は、いずれも敷地全体が「破屋」を示す灰色で着色されており、屋敷が全壊であることを示し、『嘉永七年伊賀地方大地震略記』の記述と合致する。さらに、この「海津傳右衛門」は、『記録』の六月二十一日の条に「海津傳右衛門并倅勘寿郎地震ニ付即死」とあり、父子とも即死であったことが分かっており、「父子厭れて声もせず」との記述に符合し、「破屋」とする絵図の情報を補強する。

このように、文字情報との整合性や、絵師が現地調査のうえ作成したという絵図の作成経緯から、『伊州

御城下破崖損所絵図』に記載された情報は極めて精度の高いものであると言える。

なお、地震体験を綴った前述の『嘉永七年伊賀地方大地震略記』の筆者は、その記述より、自宅が全壊したこと、その隣家が「海津氏」であること、「戸波氏」ではないことが分かることから、前述の考察と併せて、「城郭被害図」(図10)で「海津傳右衛門」屋敷の南側に隣接する「杉井孫右衛門」に比定される。また、「御家中ニテハ即死ニテモ先当分ハ怪我或ハ病死ノ届ニ相成候方多分ニ御座候故シカト相分不申候」(『嘉永甲寅六月地震記』所収『勢州岡嘉兵次来状』)とあるように、武士の体面又は家名の存続を案じてか、地震による不慮の死は秘匿されがちで、家中の即死者の把握が困難な中、海津傳右衛門父子のように、即死者の氏名、地震当時の所在とその状況が明らかになることは稀である。

§ 5. 『伊州御城下破崖損所絵図』から見る城郭被害

5.1 主要建築物の被害

『伊州御城下損所破崖絵図』の精度の高さが一定程度確認できたことから、『伊州御城下損所破崖絵図』のうち「城郭被害図」から伊賀上野城の地震被害の様相を検討したい。

まずは、城内の主要建築物を見てみたい。

城郭建築として想起されるものには天守閣、櫓、門、御殿が挙げられる。前述したように、伊賀上野城は、建築途中に天守閣が大風で倒壊、以後再建されなかったことから、城内で最も大きな建築物は東西の大手門であったが、表1の史料から、地震によりこの両大手門が倒壊したことが分かる。

この両大手門は、石垣で築かれた枡形の上に建造され、長さ21間、幅3間の多門櫓を備え、長さ7間、幅3間の袖櫓を備える日本最大級と言われる巨大な櫓門であったことが知られており、地震発生から1年後に記された記録ではあるが城内や町方等の被害を詳しく記す永濱忠太筆『伊賀国地震景況書取』[三重県(編)(1999)、宇佐美(編)(2008)]にも「東西之大手御門、石垣者百人力ニ而も動候石ニ無御座候、其上ニ多門櫓有之候処、右両御門之櫓潰レ、石垣茂崩落、誠ニ目驚而已」とあるように石垣も巨石で築いたものであったが、櫓、石垣もろ共倒壊したということである。

また、藩の郡奉行であった入交省齊筆と伝わる『地震之記』(『古地震』所収)[萩原ほか(1982)]には、「こは此国を給らせてこのかたの物にて、古しといへと異成、大石・大材にていと嚴重に仕立たるものはいふまであらざるに、側の番の逃出るへ際もなき程はやく崩れ、門はかりハカタふきながら倒れずして残りたり」と、石垣、多門櫓が巨石、巨木を使用したものであったこと、多門櫓は創建当時のもので古かったこと、石垣、櫓の崩壊が逃げる間もない瞬時のものであったこと、

門扉は大破したが残ったことを伝える。

この両大手門の被害を「城郭被害図」で確認すると図 11, 図 12 のとおりである。

これを見ると、両大手門とも、「石垣地形損所」を白色、「御家中破屋」を灰色とする凡例に従い、多門櫓は灰色、それを支える石垣が白色で着彩されている。また、門扉については、「御修復ニ不拘損所」である橙色に着彩されており、倒壊ではなく大破であることを示しており、前述の『地震の記』の記述を裏付けるとともに、「石垣共不残崩」(『破損所之覚』)とする「被害記録」の記述を補うことが出来る。なお、文字史料の被害記録の記述については、以下、表 1 を参照されたい。

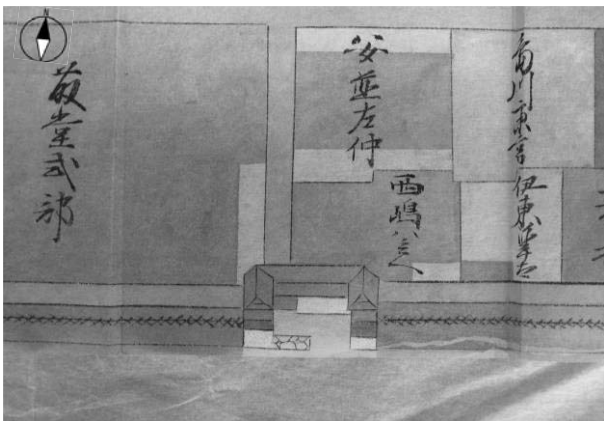


図11 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図) (部分)』

(図5のうち西大手門部分を拡大)

Fig.11 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on an area with the West Main Gate (Nishi-Oote-Mon).)

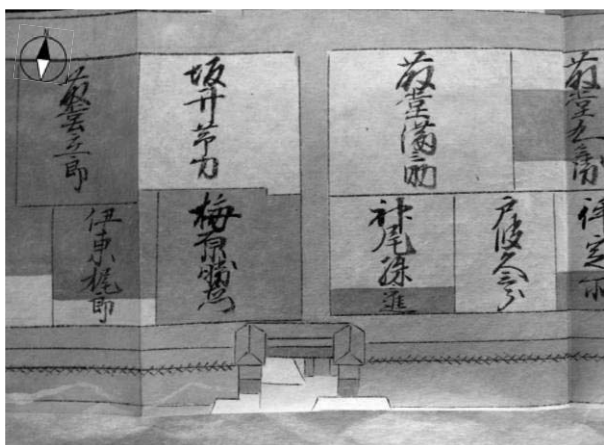


図12 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図) (部分)』

(図5のうち東大手門部分を拡大)

Fig.12 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on an area with the East Main Gate (Higashi-Oote-Mon).)

次に、城郭特有の建築物である櫓の被害を見てみたい。伊賀上野城には外郭の土居上に10棟の櫓があったことが知られる(図2参照)。うち2棟は二重櫓で、8棟は単層の櫓である。「被害記録」からは「二重櫓式ヶ所崩」(『破損所之覚』)と2棟の二重櫓が倒壊したとする。また、「西の方角櫓崩落堀中へ沈」(『破損所之覚』)、「角櫓大半堀中へ沈込」(『藤堂家御届書』)と隅櫓が堀の中へ崩落したことを伝える。この条件に合致する櫓を「城郭被害図」から求めると図13になる。

図 13 を見ると、二之丸西南角の土居上に建物が描かれている。建築平面が菱形であったことから、当時「菱櫓」と呼ばれた単層の櫓である。建物が灰色に着彩されており倒壊したことを表している。また、櫓が建つ土居が広く白色に着彩されており、「地形崩」を表していることが分かる。「被害記録」の「同所(外堀土居)西南の角折廻し土居長式拾八間崩」(『破損所之覚』)に符合する。これらのことから、菱櫓は地震による土居の崩落により、土居もろ共外堀へ倒壊し、堀中沈んでいったことが判明する。なお、幕末、明治初めの伊賀上野城絵図を見ると、この場所には建物はなく、地震後、再建されなかったようである。

さらに、「城郭被害図」から他の 9 棟の櫓を見ると、いずれも橙色に着彩されていることから、倒壊には至らず「御修復ニ不拘損所」とするが、「被害記録」には「崩同様」とすることから、被害程度は大きかったことが分かる。

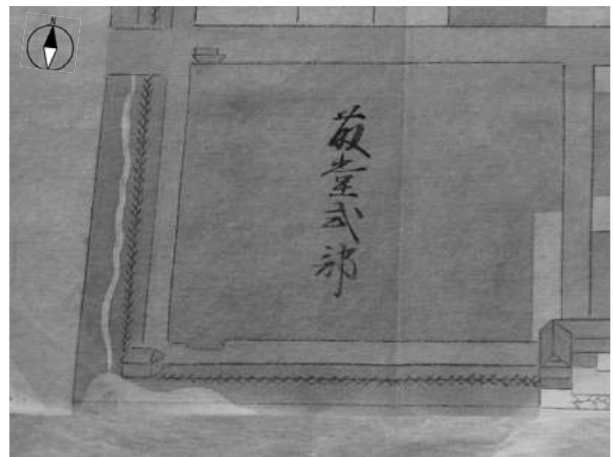


図13 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図) (部分)』

(図5のうち城郭南西隅を拡大)

Fig.13 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on the southwest corner of the castle.)

次は、本丸の東部、筒井氏時代の本丸に設けられた城代屋敷を見てみたい(図 14)。

城代屋敷には、政務を執り行う公的な建物と、代々上野城代職を務めた藤堂采女家の私的な建物が存

在したが、「城郭被害図」には屋敷建物は記載されていない。しかし、屋敷が建つあたりは、全体を灰色で着彩しており、「御家中破屋」を灰色とする凡例に従えば、屋敷全体が倒壊したことを示している。これを「被害記録」から見ると、「御本丸御住居向ヲ始悉倒端々ニテ聊残候分モ大底御同様」(『藤堂家御届書』)と城代屋敷の建物がほぼ全壊したこと示しており、絵図の情報と合致する。

なお、この他の建物について「城郭被害図」を見ると、個別に描かれた建物全てが灰色または橙色に着彩されており、城内建築物は全て損壊又大破したと考えられる。



図14 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図)
(部分)』
(図5のうち本丸部分を拡大)

Fig.14 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on an area with the centre of a castle (Honmaru).)

5.2 石垣被害と地盤の崩落

伊賀上野城は、豊臣家の滅亡に伴い、改修・拡張工事が途中で放棄されたことから未完の城と言える。そのため、西日本の近世城郭にあっては異例にも石垣使用の範囲が限定的である。その中において、天守台と本丸西側の高石垣は偉容を誇る。

天守台の被害については、「被害記録」は「天守台石垣上下共所々孕申候」(『破損所之覚』)とのみ記し、その箇所、程度等詳細が不明である。そこで「城郭被害図」(図14)を見ると、天守台東面から東南角にかけて「石垣孕」である赤色で着彩されており、孕んだ箇所が分かる。また、天守台横には添え書きがあり、「天守台南ニ而東南之内五間半高サ式間半孕東ニ而南北之内横壱間高サ式間半孕候」と、その被災規模が分かる。

また、高石垣の被害については、「被害記録」には「天守台下高石垣折廻し四ヶ所にて長さ七拾六間孕申候」(『破損所之覚』)とする。この箇所を「城郭被害

図」(図14)で確認すると、高石垣南西角 3ヶ所に赤色に着彩された「孕」を図示する一方で、高石垣北面から北西隅にかけては、石垣天端附近に「石垣地形損所」とする白色の彩色で石垣が崩落したことを示す。両史料で被害程度が合致しない点に疑問が残るが、いずれにしても、他の被害に比べ高石垣に大きな被害はないことが分かる。この高石垣は、熊本城を築いた加藤清正と並び築城の名手と言われた藤堂高虎が築いたもので、江戸時代に築城後修復の記録が無いことから、築城当時のまま維持されてきたものと思われる。大きな被害が生じなかった要因が優れた石積技術によるものか、石垣を支える地盤が固いことによるものか、または他の理由に求めるかは、今後の検討課題である。

次に、「被害記録」や絵図から垣間見られる斜面や地盤の崩落について見てみたい。「城郭被害図」(図15)を見ると、城郭北面の自然崖と外郭に築かれた土居で何ヶ所も地形が崩れたことを表示している。最も目を引くのは、北西隅の御屋敷北側の白色の彩色である。彩色のほか、それに連なる建物を朱書き線で囲い、添え書きに「此処凡式丈余クエ込ニ而、朱引之内御建物谷底へ埋込申候」と記し、がけ崩れによりその範囲の建物が谷下へ崩落したことを示しており、「被害記録」の「長屋五棟圍塀地形共高さ拾壱間長さ百七間谷底へ崩落申候」や「地所高さ拾壱間長さ三拾三間谷下へ崩落申候」(『破損所之覚』)に対応する。なお、「式丈余クエ込」の状況が明確でないが、がけ崩れの後、地盤に二丈(約6m)の崖が生じたことを表現したと思われる。

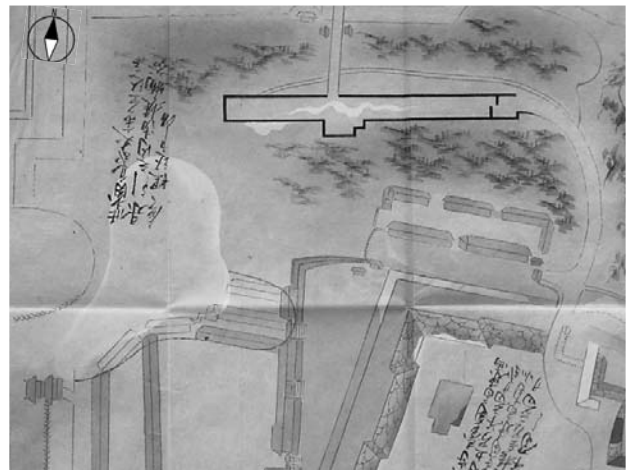


図15 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図)
(部分)』

(図5のうち城郭北西部分を拡大)

Fig.15 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5)..

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on the northwest area of the castle.)

また、当該箇所は彩色が、「御修復ニ不拘損所」である橙色に彩色された二重櫓(通称「二重櫓」)の際まで広がっていることに気づく。「被害記録」に「二重櫓(中略)内一ヶ所地形共過半崩落申候」とあり、2棟の二重櫓のうちこの条件に該当する櫓は同所だけであることから、ここで言う二重櫓は同所の「二重櫓」に比定される。そのことからこの二重櫓が隣接地のがけ崩れに伴い、地盤とともにがけ下に崩落したことが分かる。

なお、『記録』の八月二十八日(1854年10月19日)の記事に、「二重櫓地震ニ而危うく相成り候故、只今之内取払候事御都合之旨、普作兩役方申来候付承届候事」と、二重櫓の撤去について普請奉行・作事奉行から具申があり許可されていることから、この「二重櫓」を含む2棟の二重櫓が地震後倒壊寸前の状況であったことが推測される。また、2棟の二重櫓は、この際に撤去され、その後再建されなかったようで、幕末、明治初めの伊賀上野城絵図にその姿はない。

さらに、地盤の崩落を窺わせる被害として、城内北端に位置する「北谷馬場」と「北谷長屋」の被害がある。「北谷馬場」については、「被害記録」に「北谷馬場長式拾間程高さ式尺地中ヲ張出し長拾間程畑中へ崩落申候」(『破損所之覚』)、「御本丸北裏馬場長二十間高二尺程地中ヨリ張出シ長十間程畑中へ崩落申候」(『藤堂家御届書』)と記録され、馬場が地面ごとせり出したことを伝える。「城郭被害図」(図15)では、馬場の間に白色で地裂が描かれており、地盤のせり出しを表現したと考えられる。また、「北谷長屋」の被害については、「被害記録」の「長屋式棟倒三棟大破地所震下り申候」(『破損所之覚』)に対応するが、長屋の倒壊だけでなく、「地所震下り」と地滑りを想起させる表現となっている。「城郭被害図」では建物倒壊については記録と符合するが、地滑りについては明確に図示されていない(図15)。やや白色彩色痕が見受けられるが、他の記載と比較すると曖昧である。理由は不明であるが、他の地盤被害と異なり、崖や地裂等明確な変化が地面に生じず、描画が困難であったのではないかと推測する。

なお、『地震の記』の「公館も大損し、外側の長屋倒れ、北のかたにて小田村の田地へ地面ともに崩れ落ちぬ」や、『伊賀国地震景況書取』の「御城内北谷屋舗と申御厩、并手廻り茶道坊主長屋と申、長さ三拾間計之建物三ヶ所、東小田村且者北谷与申処之方江壊レ落、東小田村領之内田地七八拾間計損シ、材木畳之類山をなし申候」との記述は、城郭北部での地盤被害の状況を詳しく伝えたものであることが分かる。特に後段の「材木畳之類山をなし」との記述は、添え書きの「御建物谷底へ埋込」の状況を後世に生々しく伝える。

5.3 地裂と液状化

伊賀上野地震では、各所で液状化現象が発生したことが知られている。伊賀上野城内においても、本震に先立つ嘉永七年六月十三日(1854年7月7日)に発生した前震において、液状化現象が発生したことを窺わせる記録が伝わる。

『地震の記』には、「六月十三日朝より(中略)、午のとき地震つよくゆる、家の倒るゝほどの事ハあらねと、崇広堂(中略)の側東のかた、往還地の裂る事、長さ六七拾間巾壹尺ばかり、泥水を吹出し、大城玄関前の枳形壱ヶ所崩れたり是にて其強さをはかりしるべし」と、本震に先立つ六月十三日に前震があったこと、家が倒壊するほどの揺れではなかった城代屋敷の玄関前の枳形が1ヶ所くずれたこと、藩校・崇廣堂の東側で長さ約100m~120m、幅約30cmの地裂が発生し、その地裂から泥水が吹出したことを伝えている。この記事にある「崇広堂」は、大名小路と呼ばれた藤堂藩重臣の屋敷が立ち並ぶ通りに面して設置された藩校で、現在も「崇廣堂」として当時の建物が残されている。道を挟んだ東側には、現在、三重県立上野高等学校の敷地となっており、校舎が立ち並ぶ。地震当時は「扇之芝」と称された空閑地があったことが知られている。震災予防調査会が大正二年(1913)に発行した『震災予防調査会報告 第77号』[震災予防調査会(1913)]の中でも、その根拠は不明ではあるが、「現時の上野中学校園藝ノ前方ヨリ稍々西ニ於テ地面ニ長サ二三尺ニシテ東西ノ方向ヲ取レルニ條ノ裂罅ヲ生ジ泥水ヲ湧出セリ」とし、伊賀上野地震の液状化現象が発生した場所を、上野高等学校の前身であった当時の上野中学校の「園芸場」付近と特定している。

「城郭被害図」でこの場所を見ると図16のとおりである。本丸南の「扇之芝」の東西にそれぞれ数条の地裂が白色の彩色で描かれていることが分かる。西側の地裂を見ると(図17)、崇廣堂の東、現在の上野高等学校の敷地に当たる部分に南北の地裂が描かれていることが分かる。描画の長さから、直線では100mに満たない感はあるが、延長では『地震の記』の記述と大きくかけ離れない。このことから、この地裂が液状化現象の発生箇所と比定できる。『震災予防調査会報告』の記述とは報告とは整合しないが、このほかにも細かな地裂があったのかもしれない。なお、上野高等学校敷地内では、昭和41年(1966)以来、校舎等の建築に伴う地質調査が三重県により27カ所で実施されている。そのうち当該地付近で昭和62年(1987)に実施された調査結果(『上野高等学校武道場建築に伴う地質調査結果報告書(昭和62年9月)』)を見ると、地表から7m付近までN値が10未満の砂を多く含む層が堆積するほか、地下水位もGL-0.8mと高い値を示しており、当該地での液状化現象の発生を強く支持する。

また、扇之芝東側の地裂については、液状化現象

の発生を窺わせる史料は見られないが、同様の地裂が描かれていることから、液状化現象が発生した可能性を疑ってよいと考える。

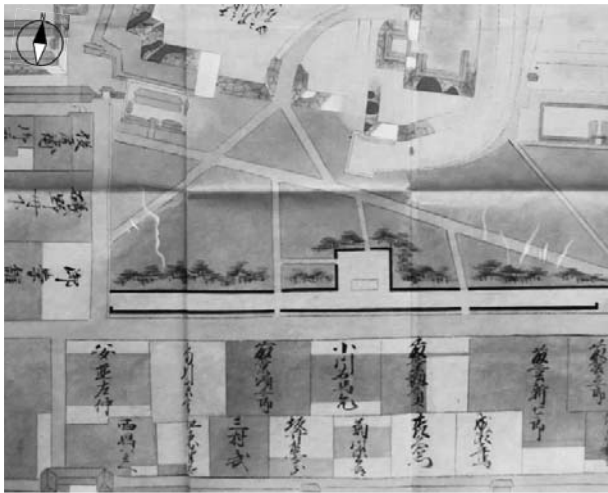


図16 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図) (部分)』

(図5のうち扇之芝部分を拡大)

※ 図中の白線は地裂を示す

Fig.16 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.5 is enlarged to focus on the large lawn area (Ougi-No-Shiba).)

(White lines indicate the crack in the ground.)

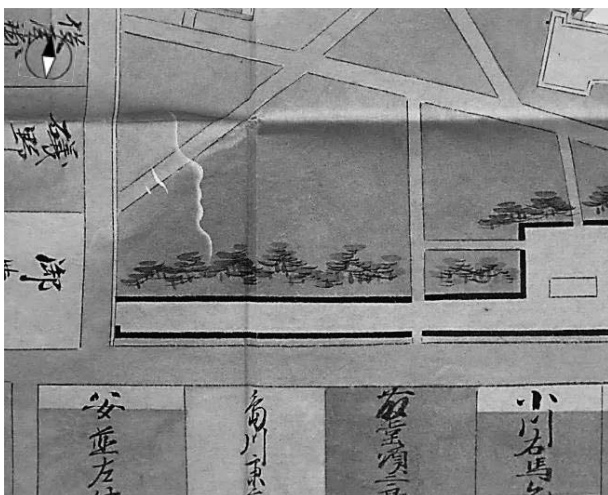


図17 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図) (部分)』

(図16のうち地裂部分を拡大)

Fig.17 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (part of Fig.5).

(The map of Fig.16 is enlarged to focus on the white lines which indicate the crack in the ground.)

5.4 城内侍屋敷の被害

城内二之丸には、高録家臣の屋敷が立ち並んで

いた。「被害記録」では、「侍屋敷潰申候聊残り候分も潰家同様御座候」(『破損所之覚』)、「御家中屋敷大半崩其外潰同様又ハ半潰ニ相成申候」(『藤堂家御届書』)と記されており、過半が倒壊、その他も大破したことが分かる。『伊賀国地震景況書取』でも「両手御門之内御屋敷建物七八歩通潰倒仕候」と、7, 8 割の侍屋敷が倒壊したことを伝えている。

これを裏付けるように、「城郭被害図」から当該部分(図18)を見ると、侍屋敷地の多くが灰色に彩色されており、多くの侍屋敷が「御家中破屋」と倒壊していることが分かる。ただし、彩色に当たっては、全壊と大破など損壊の程度により描き分けているようで、屋敷地の区画全域が彩色されているもの、全域が彩色されていないもののほか、部分的に彩色されているものが混在する。そこで、これらの描画情報から、当該侍屋敷の倒壊率を試算してみたい。

まず、「城郭被害図」を見ると、二之丸の侍屋敷地は敷地毎に区画線で区切られており、それぞれに居住者名、用途が記される。この中で「御作事屋」、「御学館」などの用途が記された区画は、藩の施設が建つ区画であり、侍屋敷地ではないことから、これらを除くと、全部で49区画ある。このうち3区画で居住者名が記載されていないが、これ以前の絵図(『絵図から見た上野城』所収)[福井(2010)]を見ると居住者名が記載されていることから、これは空き家であり、地震時には屋敷建物はあったものと考え、この区画数を侍屋敷数とする。

次に、この区画の彩色から、侍屋敷の損壊程度を判別し、分類する。前述のとおり、彩色による描き分けにより分類すれば、「屋敷地の区画全域が彩色されているもの」、「全域が彩色されていないもの」、「部分的に彩色されているもの」に大別されるが、部分的に彩色されるものには、その程度により様々なパターンがあることから、あらためて次のように細分化する。なお、彩色が無い区画については、「其外潰同様又ハ半潰ニ相成」との記録から、一定以上の破損があったものとみなし「大破」とする。

- ① 区画全域に彩色 「全壊」
- ② 区画全域が無彩色 「大破」
- ③ 区画の一部に彩色
 - ア 8割程度に彩色 「全壊」
 - イ 5割程度に彩色 「半壊」
 - ウ 5割未満に彩色 「大破」

この区分に従い、前述の49区画を分類し、軒数を数えると、「全壊」が28軒、「半壊」が6軒、「大破」が15軒となり、その割合を求めると次の表2のとおりである。

表2 分類された破損率

Table 2 The rates of damaged houses, and the rates are classified three; completely destroyed (zenkai), partially destroyed (hankai), and seriously damaged (taiha).

	全・半壊			大破	計
	全壊	半壊	小計		
軒数(軒)	28	6	34	15	49
割合(%)	57.1	12.2	69.4	30.6	100.0

このように、城内侍屋敷の全壊率は約6割の57.1%となった。また、全・半壊率は約7割の69.4%となり、前述の「両手御門之内御屋敷建物七八歩通潰倒仕候」の記述と合致する結果となった。このことから、全・半壊率を倒壊率と読み替えると、その率は、『古地震』で求められた城下町家の倒壊率25%を大きく上回り、城内の被害が、城下に比べ著しく大きかったと言えることが出来る。

なお、城内侍屋敷の倒壊率が高くなった原因については、それを明示する史料はないが、伊賀上野近郷の羽根村庄屋中村久右衛門が地震について自身の体験、見聞を記した『大地震自他見聞書』(伊賀市(編)(2012))に、「大名小路通御屋敷(中略)、残ル所ハ新に普請有之御門、或ハ玄関・長屋等ニ而」とあり新しい門等は残ったとすることから、建物の経年数が影響している可能性もある。一方で、三重県埋蔵文化センターが侍屋敷地の一角(藤堂新七郎屋敷跡)で平成24年(2014)に実施した発掘調査では、建物の礎跡の下に木製杭が4本まとめて打ち込まれていることを確認した。これは軟弱地盤において礎石建物の礎石沈下を防ぐ工法と評価されており、各地で同様の発掘事例が報告されている[三重県埋蔵文化財センター(2014)]。このことから、侍屋敷一帯が軟弱地盤であった可能性を示唆する。また、それに連なる「扇之芝」での液状化現象もその可能性を窺わせる。この点については、今後の検討課題としたい。

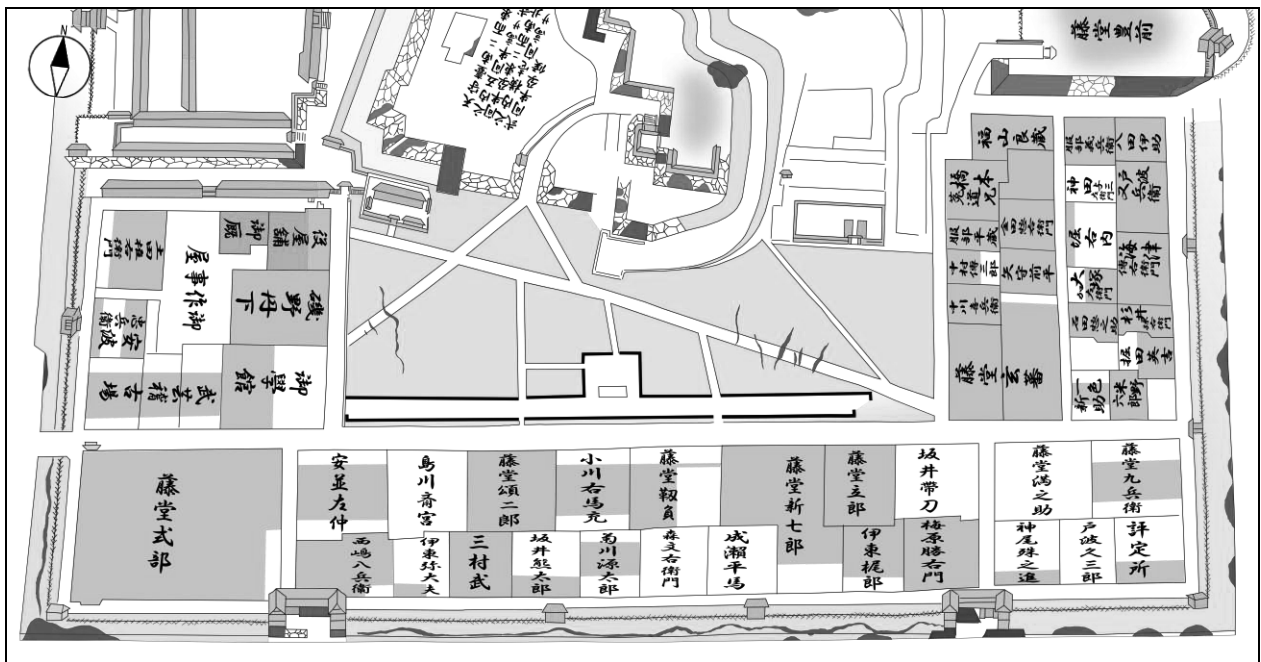


図18 『伊州御城下破崖損所絵図(城郭被害図)』の一部トレース(侍屋敷部分)
(図5より作成)

Fig 18 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno castle town (residential area for samurais (officers of Iga-Ueno Castle).)
(The map of Fig.5 is traced by author.)

§6. 城郭の復旧・復興

6.1 城郭修補について

前章までで明らかにしたように、伊賀上野地震では、城下ばかりでなく、城郭も大きな被害を受けた。城郭の普請については、武家諸法度により、修復であっても幕府の許可が必要であるとされた[藤井, 1990]。この城郭修復の許可手続きについては、先行研究で

明らかにされており[白峰(1998)], 城郭修復に当たっては、藩主から幕府老中への修補願と修補許可願絵図の提出が求められており、それに対する許可として老中奉書が発給されることとされていた。ただし、許可が必要な修復は、石垣、土居などの土工、いわゆる普請を行う場合であって、櫓、塀、門などの建築物、いわゆる作事については、原則、現状復旧に限って

許可を不要とした。

6.2 伊賀上野城城修補史料について

伊賀上野地震により破損した伊賀上野城の修復に関しては、修補を許可する老中奉書の存在が知られている。現在所在不明であるが、旧阿山郡役所文書の一つとして、その画像が残されているほか、『伊賀上野城史』[伊賀文化産業協会(1971)]に翻刻史料が掲載されており、史料は以下のように記載する。(文中の句点は引用者により追記)

以上

伊賀国上野城地震ニ而、本丸内石垣三ヶ所崩、同所石垣四ヶ所孕、同所山手壱ヶ所崩、天守台石垣式ヶ所孕、本丸東之方岸式ヶ所地割下り、同所続東より南折廻石垣壱ヶ所崩、同所南之方石垣四ヶ所崩、同所石垣壱ヶ所或崩或孕、同所西より北江石垣四ヶ所孕、同所北之方から堀端土居壱ヶ所崩、同所内堀西より北江石垣土居共四ヶ所崩、本丸外西之方石垣四ヶ所孕壱ヶ所崩、同所乾之方岸式ヶ所崩、同所続壱ヶ所地割地下り、同所北之方岸壱ヶ所崩、同所北之方から堀端岸壱ヶ所崩、同所良之方岸三ヶ所崩壱ヶ所地割地下り、同所東之方石垣三ヶ所孕式ヶ所崩、外曲輪土居東南西江折廻所々地割、東大手門東寄櫓台升形石垣共式ヶ所崩、同所西寄櫓台石垣壱ヶ所或崩或孕、同所柵下石垣壱ヶ所崩壱ヶ所孕、西大手門東寄石垣壱ヶ所崩、同所西寄櫓台石垣壱ヶ所崩升形石垣壱ヶ所孕、外堀東より南西江折廻前向共土居式拾六ヶ所石垣式拾六ヶ所或崩或孕、櫓二重櫓共七ヶ所半倒壱ヶ所倒、右土居石垣孕或崩候付而築直之事、絵図朱引之趣得其意候、願之通以連々如元可被申付候、且又櫓門多門倒其外及破損候場所如先規申付度旨令承知候 恐々謹言

安政二卯
三月朔日

牧野備前守
忠雅 花押
内藤紀伊守
信親 花押
久世大和守
広周 花押
松平和泉守
乗全 花押
阿部伊勢守
正弘 花押

藤堂和泉守殿

この史料からは、許可をされた修補箇所が分かるほか、年記から、地震翌年の安政2年3月1日(1855年4月17日)に、城郭修復について幕府から許可された

ことが分かる。なお、幕府からこの老中奉書が発給されたことが『記録』の安政二年三月十八日(1854年5月14日)に記事に記されている。「御城其外御破損所御普請、公儀御願濟ニ付、御普請ニ取掛り候様普請奉行江申達」とあり、以後、修復工事が本格化していく様子が垣間見られる。

さらにこの老中奉書に対応する修補願絵図が残されている。公益財団法人伊賀文化産業協会が所蔵する『伊賀国上野城破損之覚』(図19)[福井(2010)]と題された彩色絵図がそれである。

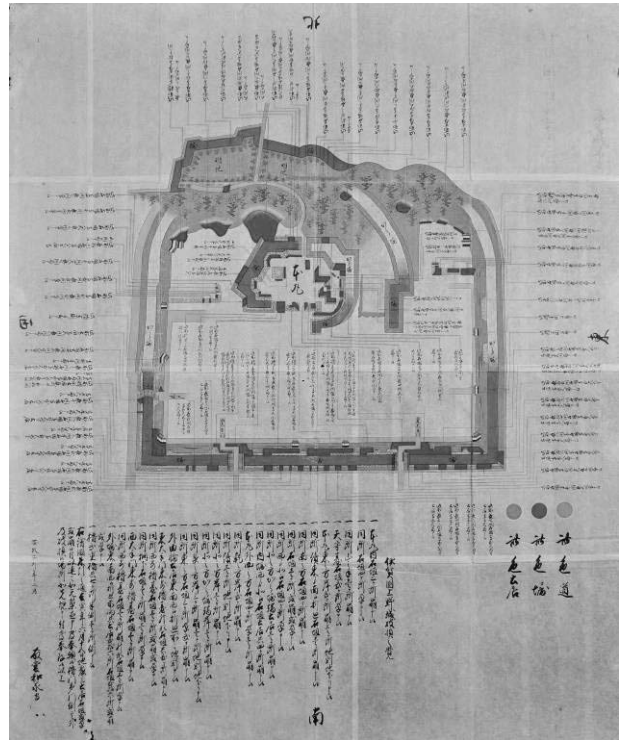


図19 『伊賀国上野城破損之覚』
(公益財団法人伊賀上野文化協会蔵)

Fig.19 Illustrated map of the damage situation at Iga-Ueno Castle.
(owned by Iga Cultural Industry Association.)

絵図余白には、「伊賀国上野城破損之覚」として、破損箇所と箇所数とその破損内容を一つ書きで記載されており、その末尾には「右絵図朱引之通、去寅年六月十五日地震ニ而、土居石垣或孕或崩候付、以連々如元築直申度奉願候、櫓門多門倒其外及破損候場所、如先規申付度奉存候、以上」、「安政二年二月 藤堂和泉守」とあり、伊賀上野地震で破損した伊賀上野城の修復にあたり、藤堂和泉守から幕府へ願ひ出た際の修補願絵図であることが分かる。料紙が薄葉紙であることから、修補願絵図の写し又は下絵であったと推測される。なお、破損箇所が記載された一つ書きの内容は、前述の老中奉書の記載に合致している。

また、破損箇所は、朱書きで示され、当該箇所に

は朱の引き出し線で「崩」、「孕」など破損の内容と長さ、高さなどその規模が書き出されている。

さらに、年記から修補願が、安政二年二月に提出されたことが分かる。日付の記載が無いので、修補願提出の詳細な日付は分からないが、先行研究[白峰(2006)]からは、修補願の提出前に幕府役人との事前交渉が終えられており、老中奉書は修補願の提出後1週間程度で発給されたと考えられることから、修補願の提出は安政二年二月後半(1854年3月)であったと推定される。地震は発生から8ヶ月を経ており、同じく2か月半後に一定の被害調査を終えていたことを考えると、異例に遅れたとの感がぬぐえない。被害の大きさから復旧の目途が立たなかった可能性が考えられるが、この間に発生した安政東海・南海地震により、さらに被害拡大(増破)した可能性も否定できない。「城郭被害図」(図5)では被害の記載が無かった内堀西側において、『伊賀国上野城破損之覚』(図19)では、破損箇所として土居・石垣の「崩」が明記されていることがこのことを強く示唆するが、そのことを裏付ける他史料を見出せないことから、今後の検討課題としたい。

6.3 地盤崩落について～修補願絵図から

あらためて『伊賀国上野城破損之覚』(図19)から、城郭被害を再確認したい。

『伊賀国上野城破損之覚』に記載された破損箇所と「城郭被害図」(図5)で被害箇所と対比すると、その箇所及び内容は、前述の内堀西側の箇所を除き、明らかな相違点は見出せず、概ね一致する。その中で、特に第5章で取り上げた本丸北の地盤の崩落箇所を確認したい(図20)。

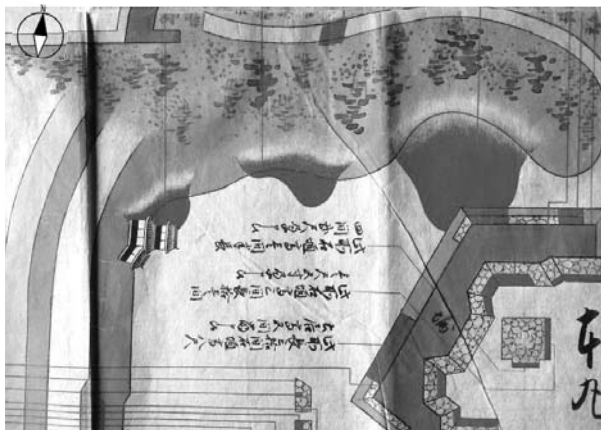


図20 『伊賀国上野城破損之覚(部分)』
(図19のうち城郭北西部分を拡大)

Fig.20 Illustrated map of Iga-Ueno Castle
Iga-Ueno castle town (part of Fig.19).

(The map of Fig.19 is enlarged to focus on the
northwest area of the castle.)

図20を見ると、本丸北から北西の二重櫓にかけて

大きく赤く着色された破損箇所が記されている。第5章で地盤崩落箇所として取り上げた北谷長屋から城郭北西隅の二重櫓までの場所にあたる(図15参照)。当該箇所の破損内容を朱引線先の記載から確認すると、西から順に以下のとおり記載される。

「此所櫓半倒高拾壱間長三拾間崩申候」

「此所崖高拾壱間長百七間崩申候」

「此所七百五十坪程地割下申候」

このことから、二重櫓際の西から2ヶ所の破損箇所が、『破損所之覚』に記された「地所高さ拾壱間長さ三拾三間谷下へ崩落申候」、「長屋五棟囲堀地形共高さ拾壱間長さ百七間谷底へ崩落申候」にそれぞれ対応し、「城郭被害図」で一体的に描かれていた地盤の崩落が2ヶ所に分かれるものであったことが分かる。

また、「城郭被害図」の被害の描写が明確でなかった北谷長屋付近での「地所震下り」(『破損所之覚』)は、その範囲が750坪(約2,500㎡)と広大であったことが分かり、その広さから地滑りであったと断定できる。

§7. まとめ

以上の考察で、藤堂藩の災害対応の過程の中で作成された史料を中心に、伊賀上野地震における伊賀上野城の被害を詳細に検証した。考察に当たっては、絵図と文字史料を対比することで、それぞれの記載内容の確かさを相互に確認するとともに、情報を補い、城郭被害の様相を明らかにした。

その結果、城下の倒壊率が25%(『古地震』)とされるのに対し、城内侍屋敷の倒壊率は約70%、大手門、櫓、城代屋敷等、城内の主要な建築物のほとんどが倒壊又は大破しており、城下に比べ、城内の被害が甚大であったことが確認できた。また、城郭を構成する構造物である石垣、土居が各所で破損しているほか、「がけ崩れ」、「地滑り」、「地割れ」、「液化化」といった地盤災害において発生することが想起される現象が随所で発生していることが明らかになった。そうした地盤の変化が、城内建築物を含む城郭の被害を一層大きくした可能性を示唆する。

一方で、城内で最も高層の構造物である本丸西側の高石垣は、天端附近を一部破損したものの、その構造そのものは崩壊することなく築城当時の姿を維持していることが確認された。城郭の甚大な被害の中で特筆に値する。この要因をどこに求めるかは今後の検討課題としたが、この要因の検討は、伊賀上野地震の実像の理解に一定資するのではと考える。

謝辞

査読者の中西一郎氏からは、丁寧かつ大変有益なご指摘、ご助言を頂戴し、本稿の改善を後押ししていただきました。また、本稿の執筆にあたっては、多く

の方々、関係機関の皆さまにお世話になりました。中でも岡森明彦氏には、史料の閲覧及び論考への使用について特別のご配慮を賜りました。さらには、同僚諸氏も、執筆に奮闘する小職を温かく見守り、陰ながら応援してくれました。ここに記して感謝申し上げます。

対象地震：1854年伊賀上野地震

文献

- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子，2013，日本被害地震総覧，東京大学出版会，154-156.
- 大長昭雄・藤田和夫，1982，安政元年6月の伊賀上野地震—連動したか？活断層，古地震，東京大学出版会，231-287.
- 伊賀市(編)，2016，伊賀市史，第2巻，通史編近世，453-477.
- 上野市古文献刊行会，1998，高山公実録，上巻，319pp.
- 東京大学地震研究所(編)，1986，新収日本地震史料，第5巻 別巻3，12-13.
- 西尾市岩瀬文庫，2010，平安読書室～山本亡羊とその息子たち～.
- 東京大学地震研究所(編)，1986，新収日本地震史料，第5巻 別巻3，63-68.
- 河内八郎(編)，1993，徳川斉昭・伊達宗城往復書簡集，校倉書房，57-59，328-337.
- 東京大学地震研究所(編)，1986，新収日本地震史料，第5巻 別巻3，94-112.
- 東京大学地震研究所(編)，1987，新収日本地震史料，第5巻 別巻5ノ1，1244-1253.
- 上野市古文献刊行会，1977，廳事類編，下巻，372-377.
- 三重県(編)，1999，三重県史 資料編近世，4，下，図版2.
- 堀井三次，1984，安政四年津藩分限帳，光書房，23pp.
- 吉村利男，2010，伊賀最初の衆議院議員・立入奇一，伊賀百筆 VOL.20，164-186.
- 東京大学地震研究所(編)，1986，新収日本地震史料，第5巻 別巻3，1-2.
- 大長昭雄・藤田和夫，1982，安政元年6月の伊賀上野地震—連動したか？活断層，古地震，東京大学出版会，232pp.
- 伊賀古文献刊行会，2013，嘉永七年伊賀地方大地震略記.
- 宇佐美龍夫(編)，2008，「日本の歴史地震史料」拾遺，四ノ上，533-536.
- 三重県(編)，1999，三重県史 資料編近世，4，下，

533-535.

- 宇佐美龍夫(編)，2008，「日本の歴史地震史料」拾遺，四ノ上，529-531.
- 萩原尊禮，1982，古地震，東京大学出版会，291-303.
- 震災予防調査会，1913，震災予防調査会報告，第77号，2-3
- 福井健二，2010，絵図から見た伊賀上野城．伊賀文化産業協会，120-181
- 伊賀市(編)，2012，伊賀市史，第5巻，資料編近世，754-767.
- 三重県埋蔵文化財センター，2014，伊賀上野城跡第13次(藤堂新七郎屋敷跡)発掘調査報告，19-22
- 藤井譲治，1990，大名城郭普請許可制について，人文學報，66，81-110.
- 白峰旬，1998，日本近世城郭史の研究，校倉書房，182-215.
- 伊賀文化産業協会，1971，伊賀上野城史，伊賀文化産業協会，315-316.
- 福井健二，2010，絵図から見た伊賀上野城．伊賀文化産業協会，82-83
- 白峰旬，2006，幕府権力と城郭統制，岩田書院.

史料

- 『安政年間 地震ニ関スル記録』，伊賀市上野図書館蔵.
- 『伊州御城下損所破崖絵図』，伊賀市 岡森明彦氏蔵.
- 『袋(伊州御城下破崖損所絵図大小式枚入)』，伊賀市 岡森明彦氏蔵.
- 『書状(差出：曾谷彦四郎)』，伊賀市 岡森明彦氏蔵.
- 『上野高等学校武道場建築に伴う地質調査結果報告書(昭和62年9月)』，三重県教育委員会蔵
- 『伊賀国伊賀上野城破損之覚』，公益財団法人伊賀文化産業協会蔵.

表 1 伊賀上野地震による伊賀上野城城郭被害一覧
 Table 1 List of damage to Iga-Ueno Castle by the 1854 Iga-Ueno Earthquake.

	番号	出典:『破損所之覚』 『破損調書』(宇和島伊達文化保存会蔵)所収]	出典:『藤堂家御届書』 『嘉永甲寅六月地震記』(西尾市岩瀬文庫蔵)所収]	
本丸	1	本丸住居向を始玄間に至迄悉倒申候其余端々の建物類も大抵同様の儀に御座候	御本丸御住居向ヲ始悉倒端々ニテ聊残候分モ大底御同様ニ御座候	
	2	玄関前雁木脇石垣崩申候		
	3	台所門番人居所共倒申候		
	4	同所高堀倒石垣所々孕申候		
	5	堀五ヶ所倒申候		
	6	天守台石垣上下共所々孕申候		
	7	天守台下高石垣折廻し四ヶ所にて長さ七拾六間孕申候		
	8	右天守台北之上り道ヲ折廻長三十間高さ十六間崩落申候		同天守台古天守台多門台高堀台并石垣等所々崩落崩申候
	9	本丸柵門左右石垣四ヶ所にて長さ貳拾壹間崩落申候		
	10	同所続東の方石垣長さ貳拾八間崩申候		
	11	同所番所七ヶ所倒申候		同番所御門長屋高堀所々倒損申候
	12	門并手廻り長屋大破に相成申候		
13	内堀土居石垣共貳ヶ所にて長さ四拾間崩申候			
二之丸	14	城内地所所々震裂地下り凡二丈程くゑ込に相成候場所も御座候	御同所地震割れ地下り所々ニ御座候	
	15	稽古場并物置中門長屋共倒申候	同所役所向稽古場等倒損申候	
	16	楼門局長屋不残倒申候	同米蔵下楽屋合五棟同底合四十三間程倒損申候	
	17	門五ヶ所倒申候		
	18	番所七ヶ所倒申候		同番所御門等合十八ヶ所倒損申候
	19	門六ヶ所大破に相成申候		
	20	米蔵二棟大破底八間余倒申候		
	21	同老棟倒申候		
	22	同老棟大破底三拾五間倒申候		
	23	下楽屋東長屋老棟大破に相成申候		
	24	仮所向同廊下式ヶ所共倒申候		
	25	長屋式棟倒三棟大破地震下り申候		長屋向合九棟倒損申候
	26	長屋五棟圍堀地形共高さ拾壹間長さ百七間谷底へ崩落申候	同五棟圍堀地形共ニ不残谷底ニ摺落申候	
	27	武具蔵地形共震下り大破に相成申候	武具蔵大破并地形共下り米蔵櫓蔵檣蔵倒煙硝蔵其外蔵五ヶ所潰損申候	
	28	同所蔵大破相成候		
	29	米蔵櫓蔵檣蔵共三ヶ所倒申候		
	30	同煙硝蔵其外蔵五ヶ所大破壱ヶ所潰損申候		
	31	銀札役所倒申候		
	32	作事方役所并人足小屋共倒申候	新古評定所作事方銀札役所并同門長屋堀共倒損申候	
	33	古評定所建物門長屋共倒申候		
	34	新評定所大破并表門長屋外通り堀共倒申候		
	35	圍堀拾五ヶ所倒申候		
	36	西大手多門石垣共不残崩形石垣孕同番所崩れ柵垣地形石垣共大損相成申候	東西御大手多門石垣柵形石垣番所共不残崩柵垣大破ニ相成申候	
	37	東大手多門石垣共不残崩形石垣崩同番所崩れ柵垣地形石垣共大損相成申候		
	38	西の方角櫓崩落堀中へ沈土手廻り櫓七ヶ所崩同様二重櫓式ヶ所崩同様	角櫓大半堀中へ沈其外二重櫓二十九ヶ所崩内一ヶ所地形共過半崩落申候	
39	侍屋敷潰申候聊残り候分も潰家同様御座候	御家中屋敷大半崩其外潰同様又ハ半潰ニ相成申候		
城外廻り及び城外	40	内壱ヶ所地所高さ拾壹間長さ三拾三間谷下へ崩落申候	御城外廻り高岸等ノ地所合九十間程谷底エ崩落并崩下り申候	
	41	本丸東の方二重櫓際地所長さ十六間同所続北にて長さ拾間余崩落申候		
	42	城外良の方地所貳拾貳間谷下江崩落申候		
	43	同所西の方高岸南北拾五間高さ拾五間程崩落申候		
	44	城外高堀台石垣西の方にて長さ七間崩落式拾七間余孕東の方にて長さ九間崩所々孕地所割下り申候		御城外圍堀并高堀台石垣土手坂口等所々夥敷崩落孕地所割下り申候
	45	北谷馬場長式拾間程高さ貳尺地中から張出し長拾間程畑中へ崩落申候		御本丸北裏馬場長二十間高二尺程地中より張出し長十間程畑中へ崩落申候
	46	京口門損同番所倒京橋橋杭倒西の方石垣大破に相成申候		御城外御門々番所々々其外石垣堀橋杭崩損申候
	47	城外住居向も凡城内住居向同様に御座候		御城外御住居向モ凡御城内御同様ニ御座候
	48	外堀土居上通惣躰地震裂地下り申候		
	49	外堀土居京橋番所裏高五間長八間崩申候		
50	同所西南の角折廻し土居長さ拾八間崩石垣孕申候			
51	西大手方東大手迄土居三ヶ所にて長百五十五間石垣三ヶ所にて長五十八間崩申候			
52	東大手方東北土居式ヶ所にて長七十八間石垣三ヶ所にて長四拾間崩申候			